

俺は彼女いない歴イコール年齢の童貞。
もうおっさんと呼んでもおかしくないような年齢だ。

そんな俺はついに童貞をこじらせて、
思わず援交というものに
手を出してしまったのだが……

「あ、あの……はじめまして。リナちゃんだよね？」

「あー、うん……」

「確か今、三年生だっけ？」

「……うん」



「あの…何して…」

「何？アタシ今忙しいんだけど。雑談とかそういう面倒なのやめてくれる？」

「い、い、い…めんなさい…」



圧倒されて、思わず敬語で謝ってしまう。
なんだこの子は…。

かなり可愛いけど…
なんかギヤルっぽいていうか…。
いまだときの子って感じた。

「あー、お金は前払いね。払ってくれたらこのまま適当にやっつけていいから」
「て、適当って…」

「やる前にちゃんとシャワー浴びてきて。あと、髪と顔と制服と下着に精液かけるの禁止。もちろんスマホも挿れるときは絶対にゴムつけて。これ破ったらマジで許さないから」
「は…は…」



スマホをいじりながらベッドに寝そべり、機械的にそう言うリナちゃん。なんか俺が想像していたのと全然違うぞ…

俺はもっと恥じらってたりとか、和気あいあいとしながらエッチする事を想像していたのに…。ちよっと帰りたくなってきた…。

しかし今日の為に二日間抜いてなかつたし、こんな可愛い子を前にしたら、それもできそうにない。



それにきつと、エッチし始めたらリナちゃんは感じてくれるはずだ。

「じ、じゃあ…まずは約束のお金を…」

「あー、うん。そ「置いといてー」

「…置いたよ。それじゃあシャワー浴びてくるから…」

「…はいはい」

多分…大丈夫だよな？



シャワーを浴びて戻ってくると、リナちゃんはさつき見た状態のままだった。お金はしっかりしまわれていたが。

俺が戻って来ても無反応なその冷たい様子に俺は近寄りたが、彼女が言った通り好きにしようとかゆっくりに近づくと、

すぐ触っていかどうか迷ったが、肩にそっと手を触れても何も反応がなかった。そのまま後ろから包み込むようにして体を触り始める。

「おお……（これが女の子の体……）」

彼女の髪や服から漂ってくる少し香水の混ざった女の子独特の匂い。

それがたまらなく興奮して、俺は情けなくもギンギンに勃起していた。

（やばい……手が止まらない……）

「……………」

もみっ♡

上着をまくり、ブラジャーを露出させる。そしてブラの中に入れて、胸を揉みしだく。

しかし彼女は全く無反応だ。
ずっと画面を見て文字を打っている。

肩越しにチラッと見たところLONNEをしている様に
見えるが：

「あの…何してるの？」

「んー、LONNE」

「…友達と？」

「まあねー」

「そうなんだ…結構やり取りしてるんだね」

「……はあ…話しかけないでってさっき言ったでしょ？
それに勝手に画面見んな」



「う……うめん……」

「……（はあ、面倒くさー。男なんて結局やれれば
どうでもいいくせに……）」

「……あと、胸触るならブラはちゃんと外して。伸びるから」
「あ……うめん……」

画面をなるべく見ないように
しながらブラを脱がせる。
おっぱいを完全に露出させても
微動だにもしない。

ぷるんっ

「この子はやっぱり慣れてるんだらうな……。
一体どれだけの男を相手にしてきたのだらう？」

恐る恐るおっぱいに手を触れ、
ふにふにと揉んでみる。

「……………（はあ…気分最悪。カラオケ行きたい…）」

やはりすごく柔らかい…これが女の子の…
女子学生のおっぱい…

初めて触る生おっぱいに何度も感動しながら、
今度は乳首をつまむ。

「……………（ユミでも誘おうかな）」

正直乳首をつまんだら少しは反応があるかと思ったが
これまた全く反応がない。

(「う、これでどうだ!」)

悔しいので乳首をクリクリと
両手でこねまわしてみる。

「……………(何コイツ。
ただ痛いだけなんだけど……
…へタ過ぎ……)」

全く反応がないなんて……
俺のテクが無いにしても、
あまりにも無反応すぎだろう……



暫く揉みしだいて、今度はスカートをまくる。

「ゴクツ…」

「……………（はあ…腕動かすなよ…邪魔だし文字打ちにくい…ただでさえ左手打ち慣れてないのに）」

思わず喉を鳴らす。
女の子のスカートをめくるのは
俺の夢だったので、それが叶った
だけでもかなり興奮物だ。

スカートをまくるとブラジャーとお揃いの色の
パンティーが露わになった。

パンティーの上からゆっくりと秘部を触る。
おお…これが女の子のアソコ…

アソコは思ったよりも弾力があってふにふにとしている。

これが多分モリマン
というものなのかな…。

その上から少し上下に
擦るように触ってみる。

「……（あ、ユミから返信……）」

しかし彼女は全く無反応だ。

「リナちゃん…パンティー脱がせてもいい？」

「…好きにすれば？」

そしてパンティーを脱がせようとすると、リナちゃんは面倒くさそうにしながらも足を動かして手伝ってくれた。

「おお…（生のおまんこだ…）」

中に指を入れると指先がハツキリと柔らかくて温かい割れ目のようなものに触れているのを感じた。

「……………（えっ？あーそっか
明後日からテストだっけ…）」

（「……………」これがオマンコの中か…感動……………）

しかし全く感じてる様子がない。それに例の濡れるというのも全くない感じだ。

気にせずそのワレメに指を入れていく。
彼女の態度とはまるで真反対のあたたかな感触…。

彼女は無反応だが正直感動している。
お、俺は女の子のおまんこに指を入れてるんだ…

「……………(勉強だるいなー!…
でも赤点取りたくないし仕方ないか…
いいよ、この後ス〇バいで勉強で)」

その中でゆっくり指を動かす。
意外と窮屈だ。この中にこの後オチンチンを入れるのか…

リナちゃんの内股で素早く指を出し入れしてみたり恐らくクリトリスだと思われ突起をグリグリ触ってみるがまったく感じる様子がない。

AVで見た時は指をこうしてただけで女の子はかなり喘いでいたんだが：

「ちよつと…痛いんだけど」

「ぐめん…」

「はあ…（コイツただ触ってるだけでまじ下手すぎ…アソコも乾いてるから余計に…さっさと終わらせよ…）」



「そろそろ挿れてくんない？
ゴムとローション、そのこの靴に入ってるから、
それ使って挿れて」

「あ……う……うん……」

リナちゃん言葉で俺は指入れを中断し、
膣内から指を出した。

情けないが、俺のアソコはずっと勃起しっぱなしで、
俺ももう入れようかなと思っていたところだった。



リナ

何をするにもスマホを触りまくるイマドキの女の子。

援交は金目的で、Hには全く興味がない。男なんて適当にやって気持ち良くなればそれでいいのだからと思っている。

その為主人公に対しても常に無愛想でHの最中もずっと無表情でスマホをいじっている。

しかし友達や親友はそこそこ居ていつもLONEで楽しくやり取りしている。

好きなタイプは、自分の為に尽くしてくれる人（顔が良ければ尚良し）

身長161cm B87/W56/H89